

人材の育成が不可欠である。私たちはアフガニスタンからの留学生・研修生を受け入れて研究指導し、世界の研究ネットワークを通じたOnline-Training(実地研修)で様々な経験の機会を活かした"Shuttle Education"を展開しながら、未来の懸け橋となるべく人材を育成している。

フィールド科学の先駆者

プロジェクト開始当初「なぜ横浜でアフガニスタン?」と尋ねられた。これは、木原生物学研究所の創始者で小麦博士として科学史に知られる木原均博士(一九三二-一九八六)に話がさかのぼる。木原博士は、パンを作る小麦がマカロニコムギとタルホコムギの自然交雑と染色体倍化により誕生したことを世界で初めて明らかにし、その研究を通して「ゲノムとは生物をその生物たらしめるのに必須な最小限の染色体セット」と定義したゲノム説を唱えた先駆的な科学者である。更にはゲノムの理論を実践に活かし、世界で最初に種無しスイカも開発した。この木原博士が、一九五五年に京都大学カ

ラコラム・ヒンズークシ學術探検隊(KUSSE)の隊長として日本戦後初の學術総合調査でアフガニスタン国内を巡り小麦の祖先を探索に出かけ、その際に四二五系統のアフガン在来小麦の遺伝資源を採集した。半世紀を超え日本の研究者たちはこれらを大切に保存し、作物の米た道や倍數性進化、遺伝育種学の研究を進めてきた。

一粒の種子が世界を救う

私たちは、二〇一二年一〇月このアフ



ダラルマン宮殿前の研究圃場で穂を出した小麦

ガニスタン在来小麦を五六年ぶりに里帰りさせて、彼の地における新しい品種改良の現地栽培研究を開始した(写真)。当初、誰もできないであろうと思われていたアフガニスタンで失ってしまった素材を、半世紀さかのぼり日本から届けることができた。アフガニスタンの土地から届いた素材と日本の科学技術を組合せ、次世代を担うアフガニスタンの若手研究者とともにすべての人のお腹が一杯になることを目指している。「腹が減るから戦はできぬ」ではなく、「腹が減るから戦になる」。少しでもこれを解決することを目指して。

半世紀前の研究者の意思を受け継ぎ、そして五〇年後の世界の食糧生産につながるごと、これこそ私たちが次世代を担う世界中の子供たちにバトンを渡す使命と感している。海を渡って里帰りした小麦は、二年目もアフガニスタン国内の四カ所の圃場で元気に芽を出している。この「奇跡の小麦」の種子は、時間と空間を超えて未来を作る、まさに命を伝えるタイムカプセルである。